

学習障害のある英語学習者に関するシンポジウム

—当事者の視点, 個に合わせた指導, ドラマ教育の可能性—

村上加代子^A, 村田美和^B, 竹田里香^C

本シンポジウムでは英語での学習に躓きを抱える学習者に関する3つの話題を提供する。村上^Aは英語の学習上の困難さの実態について, 学習困難当事者との対談を行う。村田^Bは昨年の報告に引き続き, 今年は, 高校生にURAWSS-Englishを用いた評価の様子と, ICT端末を活用した個に合わせた単語学習の可能性について報告を行う。竹田^Cは, インクルーシブな授業づくりにはクラス全体の仲間意識が重要な鍵となると考え, 仲間意識を育てる手段のひとつとしてドラマ教育について紹介する。

キーワード: 発達障害, 学習障害, ディスレクシア, ICT, ドラマ教育

1. はじめに

2022年12月に報告された「通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」(文部科学省)では, 前回(2012年)に比べて小中学校で「学習面又は行動面で著しい困難を示す」児童生徒の割合が8.8%と2ポイント以上増加した。そのうち「学習面で著しい困難を示す」のは6.5%であった(前回4.5%)。この数値は学級担任等による回答に基づくもので, 発達障害の「診断」ではないことに留意すべきではあるが, 過去10年間で特別支援教育が浸透しつつあることから教員の「気づき」が数字の増加につながった可能性も高い。「困っている」児童生徒がクラスに10%近く存在している現実, 我々はどのように向き合っていけば良いのだろうか。

2. 対談: どうして僕は, 英語ができないのだろう—答えを探し求めた10年間—

グローバル化が進む世界状況を背景に, 政府は「アジアの中でトップクラスの英語力を目指す」(文部科学省, 2013)ため, 2014年から小学校から高等学校までの学びを一貫する「英語教育改革」に着手した。2020年度から小学校5・6年生で行われていた「外国語活動(英語)」は「教科」となり, 3・4年生は外国語活動が必修化した。しかしその成果が出ているとは言いがたい。教科化から2年が経過した2021年度に文部科学省は全国学力・学習状況調査を実施したところ, 英語の学習(勉強)が好きと答えた小学6年生は前回調査よりも減少し, 「どちらかといえば, そう思わない」が31.5%と8ポイント近く増加した。英語において個人格差はこれまでも問題となってきた

^A 武庫川女子大学

^B 高崎健康福祉大学

^C 立命館大学

るが、中学校では「二極化が広がってきた」とも言われているいま、英語が難しいという学習者がどのように躓き、どのような困難さを感じているのかという学習者の視点に寄り添った指導が望まれる。

Lyon (1995) によるディスレクシアの主症状は「単語のデコーディング (decoding; 文字を音に変換する) が困難で、それは言語の1つの構成要素である音韻 (処理) 能力の欠陥による。この障害は言語発達障害の一つの特異形であり、先天性である」と定義されている。英語圏では9-10%という高い頻度で出現し、学習障害 (LD) と診断された子どもの8割を占める。日本語を母語とするディスレクシア生徒が英語学習で困難を抱えるだろうということは、これまでも指摘されてきた (上野, 2009 ほか)。日本における英語学習困難の事例では、国語にも類似の問題点が見られるなど、母国語と英語学習の双方でディスレクシアの症状が認められている。欧米における母語と外国語習得の研究でも指摘されているように、特に英語圏では、音韻認識に弱さの見られる学習困難のタイプが最も多い (音韻性ディスレクシア)。

発表者の村上は英語の読み書き困難者への学習相談を約15年間行ってきた。日本で英語を学習する児童生徒のなかにも、英語圏のディスレクシアと同じ状態で「なぜ躓いているのかわからない」と一人で悩み、苦しんでいる学習者は少なくないと感じている。大学4年生のAさんは、幼児期に英会話教室に通っていたが6才ごろから文字指導が始まると「もう行きたくない」と退会した。小学校ではローマ字が読めず、中学校進学後は教科書がまったく読めなかった。教員に相談しても解決できず、何度も書いて覚えようとして失敗を繰り返し、英語の成績が上がらないことで学習への自信を失い、他教科の成績も下がっていた。大学は指定校推薦で入学したものの、英語の極端な苦手さから自らディスレクシアを疑い、WAIS-IV (成人知能

検査) や ASD・ADHD 検査等を受けたが、発達障害ではないことがわかった。

2022 年秋に村上との学習相談をきっかけに音韻意識とフォニックスの指導研究に協力中である。自分の躓きがなぜなのかわからず苦しんだ10年間を振り返り、中学校での学習での工夫と失敗、教員や塾の指導、この数ヶ月での変化についてシンポジウムではインタビュー形式で報告する。

3. 高校での英語学習とその評価

高校でも学習につまずきを感じている生徒は多くいる。ただ、彼らにとってのつまずきは高校で始まった事ではなく、小学校あるいは中学校から継続して感じてきたものであり、自分はそのようなものであると捉えている生徒も多い。また、彼らを紐解いていくと、実は読み書きへのつまずきが背景にあり、それを学習のつまずきと捉えている生徒が含まれている。本研究では、その一端を探るべく、筆者 (村田) が日頃大学で受けている相談の中から、高校生からの相談事例と、学力的にあまり高くはない生徒の集まる高校において、英単語の読み書きの様子を、URAWSS-English を用いて評価した結果について報告する。

(1) 事例は、高校1年の生徒の相談である。彼は、中学は支援級在籍であったため、手厚く教えてもらえていて何とか勉強してきたが、高校は試験の点数が取れずに単位修得が危うい、退学はしたくないという主訴であった。

どの教科も大変であるが、とりわけ英語には苦手意識が強い様子であった。そこで、使っている英語の教科書を開き、生徒に読んでみるよう促したところ、she や yes といった3文字以上の単語を音声化することができなかった。こちらが読み上げると、その単語の意味はわかるということであった。URAWSS-English を実施した訳ではないが、教科書を用いて同じ要領で読み書きの様子を見ると、読み上げの効果と綴り

の効果は、十分にみられる様子であり理解していることがわかった。

生徒には、学習の方法と、合理的配慮の話を伝えた。まず自分で学習する際は、ICT 端末により、①音声読み上げ機能を使うこと、②綴りを書いて記憶しようとするのではなく、タイピングや音声入力機能を使って表現し、Word 等のスペルチェック機能で確認しながら勉強することを勧めた。①に関しては、写真に撮ってすぐに音声化できるアプリや、Word の読み上げ機能を紹介した。これらの学習方法により、日々の学習を継続し、必要が出てきたら合理的配慮を申請するという流れで方向性を確認した。

(2) 高校での URAWSS-English の様子を報告する。対象校は、学力的にあまり高くない公立高校において、先生方の指導のヒントのために URAWSS-English を実施した。学習に困難を抱える生徒が複数名在籍する高校であったが、学習障害の診断を受けている生徒はいなかった。URAWSS-English の結果、E→J 課題の差分が、平均して4点、J→E 課題の差分が6点の差があり、中学校の平均データと比較しても、差分が大きく出る傾向があった。また、顕著だったのは、J→E 課題①において、全生徒の約3割が1点以下であった。ただ、その中の9割は、②で読み上げを聞くことで点数が伸びていた。E→J 課題においても、同じ傾向であり、綴りの補助の効果は大きい生徒が多いという結果となった。

以上より、対象校に在籍する生徒の全体的なプロフィールとして、音声読み上げの効果や、綴りの補助の効果が高い生徒が、通常よりも多く在籍していることが明らかになった。特に困難さが顕著であった、20点満点中1点以下という生徒らについては、音声の補助や支援がないと、自力で読むことが困難であり、授業中、何も出来ないで座っているだけの状況に陥っている可能性を示唆している。

支援としては、(1) 事例の様に、ICT を活用

するという支援の他、教室内で、授業者が、こまめに音声化することを心掛けるというだけでも、授業に参加しやすくなる生徒が増えることが考えられる。ただ、学習の効果や効率性を高めるためには、GIGA スクール構想の端末を活用し、自分のペースで、使いたい時に読み上げが使えるという環境が最適ではある。教科書に関しても、電子データを利用できる環境が整いつつある今、個に合わせた機器の使用ができる教室環境というものは、今後ますます求められるのかもしれない。

4. ドラマ教育の可能性

英語のドラマ教育を学校現場に導入することは、英語力アップの基礎を作るだけではなく、自己肯定感や学習への動機づけを高め、ひいては人間そのものを成長させることができるのではないかと、また、どのような学習者も巻き込みインクルーシブな授業を行うこともできると考える。筆者(竹田)は、今回、文化庁の「文化芸術による子供育成推進事業」の中の、「コミュニケーション能力向上事業」

(<https://www.bunka.go.jp/seisaku/geijutsu/unka/shinshin/kodomo/>) を利用した公立小学校の事例を紹介する。

文化庁のこの事業は、児童・生徒に体験させたい文化・芸術関係の専門家を学校に派遣するものである。本発表は、ドラマの専門家である英語芸術学校マーブルズ代表の小口真澄氏が派遣されたものを紹介する。小口氏によるミュージカルの導入方法としては、おおむね次の8ステップになっている。①ストーリーの確認(登場人物、物語の歴史、全体の流れ)、②役決め、③歌・ダンスの導入、④場面ごとに台詞を入れる、⑤場面をつなげる、⑥場面を深める、⑦リハーサル、⑧本番(井狩・竹田・杉本・石田, 2022)。1つの英語ミュージカルを学校の希望によって異なるが、だいたい3回から4回の授業を使いクラス毎でミュージカルを創り上げ、最終日に

発表を行う。日本語での劇の経験も少なく、ましや英語で歌やダンスもあるミュージカルを短期間で創り上げることは児童にとってハードルが高い。小口氏は最初の出会から最後の発表までを見据え、真剣に児童達と向かい合う。英語講師としてもどう指導すれば児童が台詞を覚えやすいか等を心得ており、ぐいぐいとクラス全員をドラマの世界へ連れて行く。児童の初回や2回目の振り返りからは、緊張した、英語が難しかったなどのコメントがみられた。それが回を重ねるごとにクラスでいいものを作ろうという意識が出てきて、台詞を覚えられない児童がいるとみんなで練習する。最後の発表に向けて小道具や衣装も自分達で工夫をして作成する。そういった協同作業の中でクラスの一体感が生まれ、できないことに挑戦することも1人でないと感じることで、パワーをもらい全員が頑張れたといえるようになる。最後の振り返りからは、

- ・友達が助けてくれるからここまで頑張れた
- ・あまり英語が好きじゃなかったのに、えって思ったけど、終わったらとても英語が好きになって、本当に嬉しかった
- ・4回の練習であんなに協力できるんだと思ったらすごうれしかった。
- ・台詞もはじめは、これをおぼえるの？まじ？って思ったけど、最後はしっかりおぼえて良かった
- ・家でも練習していっぱいがんばった、等と仲間と助け合い、自分の限界に挑戦し、最後にはやりきった達成感と英語への自信もうかがえる振り返りが多く見られた。

1つのエピソードを紹介する。発達障がいのある児童が付き添いの先生と一緒に、みんなが練習をしている体育館にいた。彼は普段はどの授業にも参加することができず1人行動をしているということであった。しかし、その児童の様子を見ていると、自分勝手に行動をしているようにみえるが、クラスの友達の動きと連動し

た動きをしていた。そして、唯一彼がミュージカルに参加をするシーンがくるとさっと舞台に出てくる。その様子をみていると今まで入っていなかったのがわからないほどだ。戦いのシーンでお手製の剣をそれぞれが作っていたが、彼はみんなとは違いカマのような武器を作っていた。彼なりの表現だったのだろう。

ドラマはどのようなこどもと一緒に作り上げる中に存在をしているということだ。マズローの自己実現の欲求の下位項目の生理的、安全、社会的、承認の欲求が満たされ、自己実現が個々の児童に起こっているのだろうと考える。

こういったクラス全員を巻き込み、自身にチャレンジし、劇をみんなで創り上げたという体験がその後の人生においてそれぞれ大きな意味を持つと確信する。

引用文献

井狩幸男・竹田里香・杉本孝美・石田雅子

(2022). 「インプット処理過程における予測と同期の役割についてー自然な英語の定着に向けてー」, LET 関西支部研究集録, 20号, pp. 71-95.

上野一彦, 竹田契一, 下司昌一監修(2009). 特別支援教育の理論と実践 II 指導. 金剛出版.

Lyon, G.R., et al. (2003). A definition of Dyslexia. *Ann Dyslexia*. pp. 1-14.